

高橋英夫編「志賀直哉随筆集」岩波文庫 1995年10月16日刊を読む

リズムとマンネリズム - 二宮尊徳の仕事 -

1. 偉れた人間の仕事——する事、いう事、書く事、何でもいいが、それに触れるのは実に愉快的なものだ。自分にも同じものが何処かにある、それを眼覚まされる。精神がひきしまる。こうしてはいられないと思う。仕事に対する意志を自身ははっきり(あるいは漠然とでもいい)感ずる。この快感は特別なものだ。いい言葉でも、いい絵でも、いい小説でも本当にいいものは必ずそういう作用を人に起す。一体何が響いて来るのだろう。
2. 芸術上で内容とか形式とかいう事がよく論ぜられるが、その響いて来るものはそんな悠長なものではない。そんなものを超絶したものだ。自分はリズムだと思う。響くという聯想でいうわけではないがリズムだと思う。
3. このリズムが弱いものはいくら「うまく」出来ていても、いくら偉らそうな内容を持ったものでも、本当のものでないから下らない。小説など読後の感じではっきり分る。作者の仕事をしている時の精神のリズムの強弱——問題はそれだけだ。
4. マンネリズムが何故悪いのか。本来ならば何度も同じ事を繰返していれば段々「うまく」なるから、いいはずだが、悪いのは一方「うまく」なると同時にリズムが弱るからだ。精神のリズムがなくなってしまうからだ。「うまい」が「つまらない」という芸術品は皆それである。いくら「うまく」ても作者のリズムが響いて来ないからである。 P91 ~ 92
5. 武者の「二宮尊徳」も大変面白かった。
 - (1) 自分の祖父が今市時代の尊徳の弟子だった関係で、尊徳の名は子供から親んでいたが、まとまって知ったのは今度が初めてだ。尊徳の捨身なリズムの強い生活には非常にいい刺激を受けた。
 - (2) 尊徳の時代といえれば政治思想の今より動揺烈しい時らしいが、その渦に少しも巻込まれた形跡のないのは不思議な位だ。傍眼もふらず自分の目標へ一本槍で進んでいる。
 - (3) 勝海舟の「氷川清話」では、尊徳は一本気の土百姓として簡単に扱われているが、政治以外頭のない海舟としては尤もな所もあるが、今日になって見れば一家を再興し、一ヶ村、

三ヶ村を興すために十年もかかって捨身で働いていた尊徳が、当時、時代の一方を一人で背負っていた観のある海舟よりも、遙かに根本的な生命ある仕事をしていたと思うと面白い事だ。尊徳を南^{なんしゅう}洲や海舟の上に置き、世界に誇っていい偉人だという武者の説には大賛成だ。

(4)時代の流れに乗って仕事をする奴はその時、時代の流れがなければ何もしなかったかも知れぬ弱味がある。尊徳は時代の流れには没交渉な奴だった。むしろ時代の流れは尊徳に合わなかった。それでも尊徳は我流の一本槍で、^こ維れ日も足らず、捨身に進んで如何なる時代にも普遍である教えを身を以て残して行った。実に強い。武者の「二宮尊徳」は平易に書いた面白い本としてお勧めする。

P94 ~ 95

[コメント]

仕事とは何かをリズムという観点から志賀直哉が書いた文章。二宮尊徳先生について武者小路実篤の作品を通して紹介している。私も同感。

- 2009年2月24日林明夫記 -